実践報告

日本人学生と外国人留学生の共学による実績と課題点の考察

―京都大学国際教育プログラムにおける英語による日本古典文学の教育を通して―

河上　志貴子

要　旨

本稿は、日本人学生と外国人学生による共学を取り巻く種々の問題に着目し考察するものである。多国籍の学生間における学術交流を刺激し育成するために、日本の複数の大学においてこうした共学を軸にした授業が展開されている。これらの授業の教授言語は日本語または英語であることが多い。筆者は2006年より「京都大学国際教育プログラム」の一環として、日本の古典を取り上げた講義を提供してきた。交換留学生と本学正規生に同時開講されているもので、講義は英語で行われている。多国籍で、またその大半が非英語母語話者であるこれらの学生に対し、言語的にも文化的にも日本特有の産物である古典を教授する際には、さまざまな課題が表面化する。本稿を通して、外国人学生、日本人学生、各々の共学の環境に置かれた場合の強弱を明らかにし、さらに、反対にこれらの強弱を生かすという教授方法を取り入れた新しい授業形態の可能性について検討してみたいと思う。

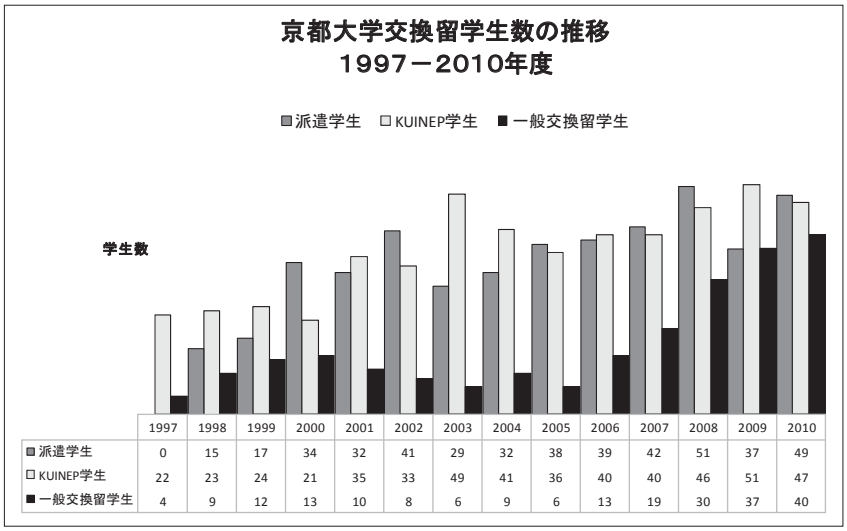
【キーワード】共学，国際教育、日本古典文学，留学生

1. 京都大学国際教育プログラム（KUINEP）の創設とプログラムの背景・特徴

京都大学はその創立100周年の1997年に、「京都大学国際教育プログラム」（KUINEP: Kyoto University International Education Program, クイネップ）を開設した。プログラムの目的は、「海外の協定校の学生に京都大学へ半年間または一年間留学する機会を与えるとともに、本学学生の国際性を育成し、留学生との相互交流を活発にすること」(1) である。本学は、授業料を不徴収とする大学間学生交流協定を締結している大学から、毎年数十名の学部交換留学生を受け入れると同時に、本学から学部生を各協定校に派遣することに力を注いできた (2)。

その取り組みの一環として、「KUINEP講義」を協定校からの交換留学生に開講している。年間20科目以上開講されているこれらの科目は、一般教養の全学共通科目として本学学部正規生にも開講されている。2009年度には、前期（春学期）、後期（秋学期）合わせて24科目が開講された。

「KUINEP講義」はすべて英語で教授されている。したがって、プログラムに参加するKUINEP学生には英語力は必修条件となっているが、日本語能力はとくに問われていない。このように、日本語学習歴が皆無の学生に対しても、本学への留学を可能にしているわけである (3)。



	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
派遣学生	0	15	17	34	32	41	29	32	38	39	42	51	37	49
KUINEP学生	22	23	24	21	35	33	49	41	36	40	40	46	51	47
一般交換留学生	4	9	12	13	10	8	6	9	6	13	19	30	37	40

図１　京都大学交換留学生数と派遣学生数の推移　1997 ～ 2010 年度

図１で示したように、京都大学の交換留学プログラムが創設された 1997 年当初は、22 人の KUINEP 学生の受入れがあり、その数は徐々に増え、2003 年には 49 人に達している。その後、凡そ定員の 40 人前後の学生を受け入れるという状況が数年続いていたが、2008 年から再び増加傾向にある。本学には KUINEP 学生の他に、一般交換留学生の受入れも行われており、2006 年までは受入れ数が多くて年間 12-13 人だったのが、翌年の 2007 年からは 19 人、30 人、37 人と著しい伸びを見せている。

一方、海外に派遣される本学正規生の数は、過去 10 年間では年間 30-50 人程度と、一定の派遣人数は維持してきたが、その伸び率は比較的緩やかで、KUINEP 学生と一般交換留学生を併せた受入れ総学生数にはまだ追い付いていない状況である。実際に昨年（2009）度には、51 人の KUINEP 学生及び 37 人の一般交換留学生の受入れがあった。派遣された本学学生数は 37 人であった。

先述したように、「KUINEP 講義」はすべて英語で実施されている。講義に限らず、レポート課題、試験、ディスカッション、また評価もすべて英語によって行われている。日本語能力の十分でない外国人留学生に対して、本学への留学のハードルを低くし、日本語力の有無だけで留学を断念せずに済むようにしているわけであるが、同時に、本学の日本人学生には、留学生と共に学びながら、英語力を向上させる機会も提供しているわけである。また、本学の日本人学生に限らず、KUINEP 学生に関しても、英語を母語としない学生が大半であるため、彼らにとっても同様に英語力を洗練するよい機会にもなっている。

KUINEP のカリキュラムは、日本やアジアの文化や社会をはじめ、経済、政治、教育、数学、物理、生命科学などと多岐に亘っている。複数の教員によるリレー式の講義と、一人の教員による単独で行われる講義がある。毎学期 12 回分（12 週間）の講義が実施されており、1 回につき 90 分の講義が行われる。協定校の留学生（KUINEP 学生、一般交換留学生）には、母国で履修した科目と同様に単位認定の対象となっている。本学正規生には全学共通科目として、各科目につき 2 単位が認定される。ただし、KUINEP 学生、一般交換留学生に関しては、単位互換の可否は各学生の出身大学側の判断に委ねられており、本学で履修した科目の単位が必ずしも自動的に認定されるわけではない。

2. KUINEP 講義「日本古典文学入門」の開講

2.1 講義の開講と目的

筆者が提供している KUINEP 講義「日本古典文学入門」は 2006 年秋学期より開講したもので、すでに 4 回実施している。本授業は毎年秋学期のみに開講している。

本授業の位置付けと主な目標は次のとおりである。

1) 日本古典（日本文学）、または日本史、日本文化や日本学などを専攻とする交換留学生に対し、帰国後の継続的学習（国内外大学院進学の場合を含む）につながるような日本古典の基礎的知識及び分析力を養うこと。

　本授業は、日本古典、日本文学、日本文化、日本史、またはアジア文化、アジア学その他関連の研究分野において、文語文で書かれた資料や文献を扱う上で必要となる古典文法の予備教育としての役割も大きいと考える。古典文法の知識を必要とするのは必ずしも日本古典や日本文学を専攻とする学生のみではない。坂内（2004）は、さまざまな分野の研究活動において、学生は文語文で書かれた文献、史料、書簡、公文書、法律関係の資料、論文などを扱うため、文語文の知識と読解力を身につける必要があると指摘している [(4)]。

2) 多国籍の受講生を対象にした講義、グループディスカッションなどを通して、奈良時代から江戸時代までの主な古典作品を概観し、また各時代の歴史的文化的背景について、日本人学生と外国人留学生が共に同じ教室の中で学習しながら、学術交流が発展するような教育環境を提供すること。

3) 外国人留学生と日本人学生の日本古典の理解度を深めつつ、各人が日本古典、日本文化及び関連分野について、より広く国内外に発信できるように日本文化コミュニケーション能力 [(5)] を育成すること。

2.2 講義内容と進行方法

本授業では、日本古代から近世までの代表的な古典作品を通して、繰り返し現れる日本古来の、さまざまな文学的理念、規範、価値観等について考察すると共に、これらの文学的理念等が、どのように形成され、またどのような変遷を経て、現代にまで継承されてきたかについて考察を試みることとしている。テキストはすべて英訳を使用する [(6)]。

12 週間に亘り、日本の古典とそれにかかわる日本の文化・歴史の重要な事柄を、奈良時代から江戸時代まで時代順に概観し、各時代の代表的作品を読み進める。各時代の作者が、どのような出来事、事柄、性質によって刺激を受け、触発されたのか、そして、その刺激に対し、いかに文学的に答えようとしたのかを検討する。

作品毎に、いくつかのテーマ（キーワード）に焦点を当て、単に作品の内容そのものを理解するだけに留まらず、さまざまな文学的理念、規範や価値を抽出できるようにする。当時の日本人は、どのようなものを好み求め、どのようなものを敬遠したのか、何を是とし、何を非としたのかを考える。この作業と過程を繰り返すことにより、どのように日本人の価値観が形成され、どのように変化しあるいは衰退していったかを考察する契機ともなる。古代日本の文化と社会の理解に限らず、現代日本の文化と社会の理解も深まるように心がけているわけである。これまでに取り上げたテーマは、「もののあはれ」、「をかし」、「いろごのみ」、「無常」、「幽玄」、「花」、「わび」、「さび」、「勧善懲悪」等などである。また、「一夫多妻制」、「妻問ひ」、「隠遁」、「ますらを（振り）・たをや

め（振り）」、「判官贔屓」、「義理人情」など、社会的慣習、生活様式や価値観の類についても考察する。

過去四年間で本授業で取り扱った主なジャンルと作品は次のとおりである。

・和歌（『萬葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』）
・史書（『古事記』、『日本書紀』）
・日記（『土佐日記』）
・物語（『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『堤中納言物語』、『平家物語』）
・随筆（『枕草子』、『方丈記』、『徒然草』）
・能、浄瑠璃、歌舞伎（世阿弥、近松門左衛門など）
・俳諧（『奥の細道』）

2.3 対象とする学生

対象とする受講生は、毎年秋学期、春学期に来日する協定校の KUINEP 学生（主に 3、4 回生）と一般交換留学生（主に 4 回生以上）、並びに本学学部正規生（主に 1 回生で、ほとんどが日本語を母語とする学生）である。過去四年間の受講生の国･所属学部は表１－１､１－２のとおりである。

また、表 2 で示したように、KUINEP 学生の本授業の受講状況を見ると、過去四年間で 15 人から 31 人へと倍に増えていることが分かる。2009 年度時点では KUINEP 受入れ総学生数（51 人）の 6 割が本授業を受講していたことになる。

表１－１　本授業の交換留学生数（国別）

KUINEP学生	2006	2007	2008	2009
アメリカ合衆国		1		2
イスラエル国		1	3	
英国		1		2
オーストラリア連邦		3	2	1
オーストリア共和国	1		1	
オランダ王国	1	1	4	2
カナダ	2		1	
シンガポール共和国	1	2	1	1
スイス連邦			1	
スウェーデン王国	1		1	
スペイン				1
タイ王国	1		3	4
大韓民国	5	3	3	2
台湾		1	2	1
中華人民共和国			2	2
ドイツ連邦共和国	1	4	3	6
フランス共和国	2	2		3
ベルギー王国				
ポーランド				1
マレーシア				1
メキシコ合衆国				2
計	15	19	27	31
一般交換留学生				
アメリカ合衆国		2		
オーストラリア連邦			1	
スウェーデン王国		1		
大韓民国	1		1	1
中華人民共和国				1
計	1	3	2	2
交換留学生　合計	16	22	29	33

表１－２　本授業の受講生（所属別）

KUINEP学生	2006	2007	2008	2009
教育学部		1		
経済学部	5	4	1	3
工学部			3	1
総合人間学部	4	3	12	20
農学部			1	
文学部	6	8	6	4
法学部		2	1	2
薬学部		1	2	
理学部			1	1
計	15	19	27	31
一般交換留学生				
教育学部	1			
工学部			1	
総合人間学部		3	1	2
計	1	3	2	2
交換留学生　合計	16	22	29	33
本学学部正規生				
医学部		2	1	2
教育学部				
経済学部		1	2	2
工学部				1
総合人間学部	3			1
農学部	4	2		
文学部	8	2		3
法学部	1			1
薬学部			3	
理学部	2		1	
計	18	7	7	10
本学大学院正規生				
情報学研究科				1
計	0	0	0	1
本学正規生　合計	18	7	7	11

表2 「日本古典文学入門」を受講したKUINEP学生数の変動　2006～2009年度

	2006	2007	2008	2009	計
KUINEP学生数	40	40	46	51	177
「日本古典文学入門」を受講したKUINEP学生数	15	19	27	31	92
%	**38%**	**48%**	**59%**	**61%**	**52%**

2.4 評価方法

以下を以て受講生の成績判定を行う。

1） 出席及び、授業への参加態度、2）期末レポート。

レポート課題（ペーパートピック）は、担当教員が指定した3つのものの中から一つ選択する。学生は各自で選択した作品（またはその一部）を対象に、本授業で取り上げたテーマ（キーワードなど）の観点から分析・考察し、英語で10～15枚のレポートにまとめ、引用は必ず出典を明記した上で提出することになっている。

レポートの作成方法や課題の選択について、授業期間中を通して担当教員と相談できる機会を設けている。提出後は、各人のレポートを採点し、総合評価及び具体的なコメントをレポート本文に添付するなどして、必ずフィードバックをするようにしている。

3.「日本古典文学入門」を受講する留学生と日本人学生の学習スタイルと特徴

3.1 受講目的

3.1.1 交換留学生（KUINEP学生）

表3は2009年度に本授業の受講者を対象に中間アンケートを実施した際に、受講目的について計34人の学生から得られた回答を分析した結果である。「日本の古典に興味があるから」、「日本語に興味があるから」、「日本の文化、歴史、社会などに興味があるから」について該当の有無を尋ねたところ、KUINEP学生25人のうち、これら3つすべてが該当すると答えた学生が10人（40%）であった。また、「日本の古典に興味があるから」と答えたKUINEP学生が1人（4%）、「日本の古典および日本の文化、歴史、社会に興味があるから」と答えたKUINEP学生が2人（8%）であった。アンケートに回答したKUINEP学生のうち、13人（52%）が日本の古典に何らかの興味を持って本授業を受講した様子が窺われる。

しかし、むしろここで注目されるのは、「日本の古典に興味があるから」を一切選択しなかったKUINEP学生が11人（44%）もいたということである。内訳を見ると、「日本の文化、歴史、社会などに興味があるから」を選択した学生が6人、「日本語に興味があるから」を選択した学生が1人、またその両方を選択した学生が4人である。つまり、KUINEP回答者の4割以上を占めるこれらの学生は、少なくとも受講登録時においては、日本古典そのものへの興味というよりも、むしろ日本の文化・歴史・社会をはじめとする日本文化全般に興味があって本授業を受講したと見るべきであろう。

表３　受講生の受講目的（授業内容と関連のある理由）

（2009 年度 KUINEP 講義「日本古典文学入門」受講生対象中間アンケートより）

受講目的 （授業内容と関連のある理由）	交換留学生		本学正規生※		全回答者	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本の古典に興味があるから	1	4%	2	22%	3	9%
日本語に興味があるから	1	4%	0	0%	1	3%
日本の文化、歴史、社会などに興味があるから	6	24%	1	11%	7	21%
日本の古典および日本語に興味があるから	0	0%	0	0%	0	0%
日本の古典および日本の文化、歴史、社会などに興味があるから	2	8%	2	22%	4	12%
日本語および日本の文化、歴史、社会などに興味があるから	4	16%	0	0%	4	12%
日本の古典、日本語および日本の文化、歴史、社会などに興味があるから	10	40%	1	11%	11	32%
授業内容と直接関連のない理由で受講した学生	1	4%	3	33%	4	12%
計	25	100%	9	100%	34	100%

※本学正規生に1名外国籍の大学院生を含む。

3.1.2 本学正規生

一方、「日本の古典に興味があるから」、「日本の文化、歴史、社会などに興味があるから」を受講目的として挙げた本学正規生は比較的少数であった。9 人（うち、8 人が日本人学部生、1 人が外国籍の大学院生）という限られたサンプルであるため、この結果のみを以て直ちに結論付けるわけにはいかないが、本学正規生に関しては、日本古典や日本文化への興味そのものが本授業を受講する重要条件とは考えていないようである。次節で述べるように、本学正規生には、むしろ本授業が留学生と一緒に勉強する機会であること、また教授言語が英語であることが重要視されているようである。

3.2 共学への意識・期待（交換留学生・本学正規生）

先述した中間アンケートでは、授業内容とは直接関係のない受講目的についても尋ねてみた。多国籍の学生と共に学ぶことや教授言語が英語であることが、どの程度学生の受講目的に影響しているかを測ってみた。表 4 で示したように、「日本の古典をさまざまな国の学生と一緒に勉強してみたかったから」、「授業が英語で行われているから」、また「授業の受講が必修または卒業単位として必要だから」の項目について該当の有無を尋ねたところ、KUINEP 学生においては、「日本の古典をさまざまな国の学生と一緒に勉強してみたかったから」と答えた学生が 5 人（20%）であった。本授業が、日本人学生や他国の留学生と共に学習できる機会であることへの意識はさほど高くないようである。

表４　受講生の受講目的（授業内容と関係のない理由）

（2009 年度 KUINEP 講義「日本古典文学入門」受講生対象中間アンケートより）

受講目的 （授業内容と関連のない理由、複数選択可）	交換留学生 【25人】		本学正規生※ 【9人】		全回答者 【34人】	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本の古典を、さまざまな国の学生と一緒に勉強してみたかったから	5	20%	6	67%	11	32%
授業が英語で行われているから	6	24%	7	78%	13	38%
授業の受講が必修または卒業単位として必要だから	2	8%	0	0%	2	6%

※本学正規生に1名外国籍の大学院生を含む。

また、「授業が英語で行われているから」と答えた留学生が６人（24%）のみで、授業での教授言語が英語であることも、この結果を見る限りでは特に必須条件ではないようである。ただし、先に述べたように、来日する前から、本授業を含めて KUINEP 講義はすべて英語で受けられることがあらかじめ保障されているため、KUINEP 学生が取り立ててこれを受講の理由としなかった可能性は高い。なお、本授業の「受講が必修または単位として必要だから」受講したと答えた KUINEP 学生は２人（8%）のみであった。

一方、本学正規生９人（うち、８人が日本人学部生、１人が外国籍の大学院生）においては、「日本の古典をさまざまな国の学生と一緒に勉強してみたかったから」と回答した学生が６人（67%）であった。決して充分なサンプルとは言えないが、彼らは多国籍の学生との共学を強く意識していることは確かなようである。さらに、９人中７人（78%）が「授業が英語で行われているから」と答えており、共学の実現と充実に不可欠である英語のコミュニケーション能力を向上させたいという彼らの意志が読み取れる。

3.3 日本古典の予備知識（交換留学生・本学正規生）

本授業は、日本古典の予備知識がない学生も受講できるように、日本古典文学の入門編と位置付けている。昨年（2009）年度においては、日本の古典を学ぶのが初めてだという KUINEP 学生が回答者 25 人のうち 22 人で、９割近くを占めている。本学正規生においては、９人（うち１人は外国籍の大学院生）中の８人が古文の予備知識を有する学生であった。

表５　受講生の日本古典の学習歴

（2009 年度 KUINEP 講義「日本古典文学入門」受講生対象中間アンケートより）

日本古典の学習歴	交換留学生		本学正規生※		全回答者	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
日本の古典を学ぶのは今回が初めてである。	22	88%	1	11%	23	68%
以前にも日本の古典を学んだことがある。	3	12%	8	89%	11	32%
計	25	100%	9	100%	34	100%

※本学正規生に1名外国籍の大学院生を含む。

3.4 受講生がレポート課題に選んだ文学作品（交換留学生・本学正規生）

さて、レポート課題の対象作品として、受講生がどのような作品を選択するかについて、過去四年間に提出されたレポートを調べ、表６にその結果を作品別に掲げた。交換留学生にもっとも多く選ばれたのは『源氏物語』である。数カ国語に翻訳され、今や世界文学として知られる『源氏物語』が突出した人気を博すのは予想されうることであるが、特に 2008 年度以降これを選ぶ学生の数が急増していることを考えると、ちょうど『源氏物語』千年紀記念の年であったことが学生の意識を高め、選択を左右したのではないかと思う。この他に、複数の文学作品（散文）を対象に比較文学的に考察するというレポートや、『萬葉集』を取り上げた学生も比較的多く見られた。本学正規生には上記のような傾向は特に見られず、どちらかと言えば複数の歌集の和歌を比較するといった課題が割に多かった。その理由としては、おそらく英訳の場合、長編の物語などに比べ和歌など韻文の方が、彼らにとってより扱いやすい素材であるからだと考えられる。

この他に興味深い結果としては、『竹取物語』が留学生に意外にも多く選ばれていることである。

話の筋が分かりやすい上に、かぐや姫に求婚する五人の男を巡る難題婿の話などは、他の国の文学にも見られるテーマなので、親しみやすい感があるのであろう。

表６　受講生がレポート課題に選んだ文学作品・ジャンル

受講生がレポート課題に選んだ文学作品・ジャンル※	2006		2007		2008		2009		2006～2009					
	交換留学生	本学正規生	交換留学生	本学正規生	交換留学生	本学正規生	交換留学生	本学正規生	交換留学生	%	本学正規生	%	全受講生	%
源氏物語	2	2	1	1	7	1	8	1	18	18%	5	12%	**23**	17%
複数の文学作品（韻文）	1	5		2	1	1	2	1	4	4%	9	22%	**13**	9%
複数の文学作品（散文）	1		3		3		4	2	11	11%	2	5%	**13**	9%
萬葉集	1	2	4	1	3		2		10	10%	3	7%	**13**	9%
竹取物語			2		5	2	2	1	9	9%	3	7%	**12**	9%
伊勢物語		1	1				2	2	3	3%	3	7%	**6**	4%
奥の細道	2				1		1	1	4	4%	1	2%	**5**	4%
土佐日記	1		2		1		1		5	5%	0	0%	**5**	4%
方丈記	2	1			2				4	4%	1	2%	**5**	4%
枕草子		1	1				3		4	4%	1	2%	**5**	4%
徒然草		1		1	1	1			1	1%	3	7%	**4**	3%
平家物語			1		1		1	1	3	3%	1	2%	**4**	3%
古事記		1	1				1		2	2%	1	2%	**3**	2%
御伽草子			1				1		2	2%	0	0%	**2**	1%
新古今和歌集		2							0	0%	2	5%	**2**	1%
能	1					1			1	1%	1	2%	**2**	1%
俳諧					2				2	2%	0	0%	**2**	1%
百人一首	1								1	1%	0	0%	**1**	1%
昔話			1						1	1%	0	0%	**1**	1%
その他	2	2	4	2	2	1	5		13	13%	5	12%	**18**	13%
計	**14**	**18**	**22**	**7**	**29**	**7**	**33**	**9**	**98**	**100%**	**41**	**100%**	**139**	**100%**

注：
外国の文学作品との比較文学的考察の場合に選ばれたものも含む。
2006年本学正規生に1名外国籍の学部生を含む。
2009年本学正規生に1名外国籍の大学院生を含む。

3.5 レポート課題の完成度、受講生の取り組み方（交換留学生・本学正規生）

本授業の受講生のレポート課題への取り組み方やレポートの完成度について、一言触れておく必要があろう。過去四年間で提出されたレポートにおいて、特にレポートの構成や書き方の面で、留学生と本学正規生の間にばらつきが見られる。

英語でレポートを作成するに当たっては、当然ながら英語圏の留学生や、英語で書かれた文系・社会系の論文・解説文に読み慣れている留学生は有利な立場にある。また、交換留学生はそのほとんどが3、4回生ということもあって、出身大学における一般教養または専門課程の中で、すでにアカデミック・ライティング等の授業を経て来ている可能性が高い。したがって、これらの学生は文献の調査方法、レポートの構成・バランスの取り方、引用の扱い、出典の明記等は大凡心得ているようである。また、来日時にすでに卒業論文の作成作業に取りかかっている交換留学生も少なくない。

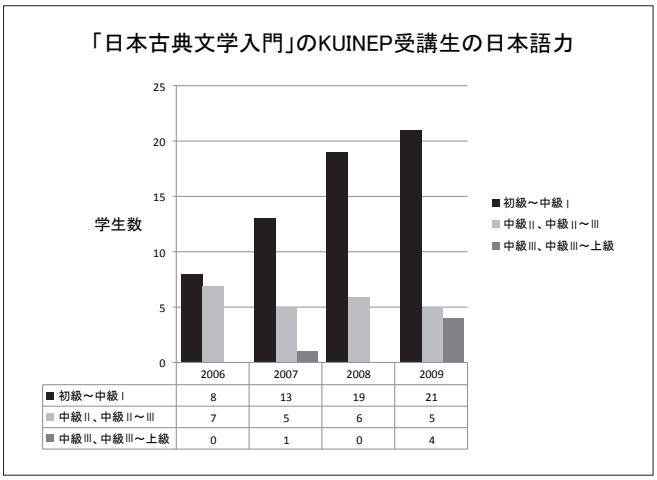
一方、本授業を受講する本学正規生は、その９割が１回生であるため、大学で課せられるレポートの作成や文献の調査方法には不慣れな学生が多く、英語で論述するという経験もまだ浅い。実例に基づいて自分の考えを具体的に且つ実証的に述べ、相手を説得するための論述の場ではなく、レポートは主観を基調としたエッセイや感想文だと誤解している面もあるようである。

また、先述したように、筆者はオフィスアワーを提供するなど、学期を通して本授業のレポート課題のテーマ選び、文献の調査方法、レポートの作成方法について受講生が相談しやすい体制作りに努めてきた。毎年、レポート課題について、平均して十数人の交換留学生が相談に訪れている。これに対し、過去四年間で本学正規生から受けた相談の件数は三件に留まる[(7)]。

4. 日本古典を題材とした共学の特徴と問題提起

4.1 受講生の言語能力

4.1.1 日本語能力（交換留学生）



	2006	2007	2008	2009
■ 初級～中級Ⅰ	8	13	19	21
■ 中級Ⅱ、中級Ⅱ～Ⅲ	7	5	6	5
■ 中級Ⅲ、中級Ⅲ～上級	0	1	0	4

図２　「日本古典文学入門」の KUINEP 留学生の日本語受講状況（レベル別）

過去四年間に本授業を受講した KUINEP 学生の日本語力を図２に示した。ここに提示する各レベルは、これらの KUINEP 学生が実際にその学期に受講した本センターの日本語授業のレベルを示している。本センター日本語授業を受講する留学生は、学期初めに日本語プレースメントテストを受け、その結果によって、初級 I、II、中級 I、II、III、上級と６つのレベルに配置される [(8)]。過去四年間のレベル分けを見ると、初級（完全初級者を含む）から中級 I レベルの学生が最も多く、各年度における KUINEP 学生の約７割を占めている。昨年度（2009）においては、KUINEP 学生 30 人のうち、21 人が初級～中級 I、５人が中級 II（または中級 II･III）、また４人が中級 III（または、中級 III・上級）の日本語クラスを受講した [(9)]。

2009 年度の中間アンケートでは、受講生に日本語能力と英語能力を自己判定で評価してもらった。回答した 25 人の KUINEP 学生のうち、10 人が「初級文型を理解でき、かなの読み書きができる程度」、12 人が「日常生活に不自由を覚えない程度」と答えた。「学部授業を理解できる程度」、「レポートや論文の読み書きができる程度」はそれぞれ２人、１人であった。大半の学生は日常生活においては支障なく日本語でコミュニケーションが取れると感じているようだが、大学の講義や授業を完全に日本語で受けること、また学術的な事柄について日本語で論述することに対しては、まだ敷居が高いと感じている様子が窺われる。

筆者が提供している「日本古典文学入門」ではプログラム全体の方針に沿って、講義やクラス内のディスカッションをすべて英語で行っているが、仮に同等の内容の授業を日本語で実施した場合には、受講生には日本語能力試験 N2（旧試験２級相当）以上の日本語能力を有することが望ましいと考える。本センターの日本語授業だと、中級 III 以上のクラスを受講する学生の日本語能力に相当するレベルである [(10)]。

4.1.2 英語能力（交換留学生・本学正規生）

KUINEP 学生には、毎学期 6 科目 (11) 以上の KUINEP 講義の受講が義務付けられているため、プログラム参加には充分な英語能力を有することが必須条件となっている。ただし、現時点では、協定校の学生に対し、KUINEP への参加に必要な英語能力、例えば「TOEIC/TOEFL □□点以上」などといった具体的な基準は設けていない。

2009 年度の中間アンケートでは、日本語能力に加えて、受講生の英語能力についても尋ねた。自己判定で回答してもらったところ、「母語またはそれに相当する程度」と答えた KUINEP 学生が 25 人のうち 11 人、「レポートや論文の読み書きができる程度」が 8 人、「学部の授業が理解できる程度」が 5 人、また「日常生活に不自由を覚えない程度」が 1 人であった。回答者 25 人中 19 人(76%) は、レポートを英語で作成することに対して特に抵抗はないと見られる。しかし、残り 6 人は自己の英語能力はレポート課題をこなすのにはまだ充分でないと感じているようである（表 7)。アンケートに回答した KUINEP 学生の 4 人に 1 人が自己の英語能力に対してかなり消極的な評価を下しているわけである。

また、本学正規生については、回答者 9 人（うち、1 人は外国籍の大学院生）のうち、「レポートや論文の読み書きができる程度」の英語能力があると答えた学生が 2 人 (22%) に過ぎなかった。

4.2 授業資料の使用言語の問題

先に述べたとおり、過去四年間に「日本古典文学入門」を受講した交換留学生で、際立って高度な日本語能力を有する者は極めて少ない。したがって、本授業を受講するに当たって、各作品の英訳をはじめ、英語による情報や参考資料は交換留学生にとって必要不可欠である。一方、古典作品の原文あるいは現代日本語訳に対する彼らの関心や注目は、さほど高くないのではないかと推測される点も見られる。

表７　受講生の英語能力・日本語能力

（2009 年度 KUINEP 講義「日本古典文学入門」受講生対象中間アンケートより）

語学力 （回答者自己判断による）	交換留学生		本学正規生※		全回答者	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
英語能力						
日常会話に不自由を覚えない程度	1	4%	2	22%	3	9%
学部授業が理解できる程度	5	20%	4	44%	9	26%
レポートや論文の読み書きができる程度	8	32%	2	22%	10	29%
母語話者またはそれに相当する程度	11	44%	0	0%	11	32%
無回答	0	0%	1	11%	1	3%
計	**25**	**100%**	**9**	**100%**	**34**	**100%**
日本語能力						
初級文型が理解でき、かなの読み書きができる程度	10	40%	0	0%	10	29%
日常会話に不自由を覚えない程度	12	48%	1	11%	13	38%
学部授業が理解できる程度	2	8%	0	0%	2	6%
レポートや論文の読み書きができる程度	1	4%	0	0%	1	3%
母語話者またはそれに相当する程度	0	0%	8	89%	8	24%
無回答	0	0%	0	0%	0	0%
計	**25**	**100%**	**9**	**100%**	**34**	**100%**

※本学正規生に1名外国籍の大学院生を含む。

しかし、彼らは決して英訳だけで満足しているわけではなく、むしろ、日本の古典を扱う際に、日本語能力に関係なく、古語による原文や現代日本語訳を、英訳文と併用することが望ましいと考えているようである。表８で示したように、2009 年度の中間アンケートでは、KUINEP 回答者 20 人のうち、「現代日本語訳があったほうがよい」と答えた学生が６人、「原文があったほうがよい」と答えた学生が４人、また「原文と現代日本語訳の両方があったほうがよい」と答えた学生が８人であった。実に９割の留学生が何らかの日本語による資料があったほうがよいと考えていることになる。反対に「原文や日本語訳は必要ない」と答えた KUINEP 学生は２人のみであった。

表８　「日本古典文学入門」配布資料　英訳、現代日本語訳、原文の兼用の必要性

授業の配布物について	交換留学生		本学正規生※		全回答者	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
1）作品（テキスト）の原文があったほうがよい	4	20%	3	33%	7	24%
2）作品（テキスト）の現代日本語訳があったほうがよい	6	30%	1	11%	7	24%
3）原文と現代日本語訳の両方があったほうがよい	8	40%	2	22%	10	34%
4）原文や現代日本語訳は必要ない	2	10%	2	22%	4	14%
5）その他	0	0%	1	11%	1	3%
計	20	100%	9	100%	29	100%

無回答者を含まない。
※本学正規生に外国籍の大学院生1名を含む。

必ずしも高度な日本語能力を有するわけではない本授業の交換留学生は、なぜ現代日本語訳ないし原文のテキストに関心を寄せるのか。先に述べたように、本授業の KUINEP 学生の過半数は英語を母語としない学生である。また、日本の古典を勉強するのが初めてだという学生が９割近くにも上る。英語を媒介語または公用語として、日常生活あるいは自分の専門分野で用いることはあっても、日本の古典を英訳本で以前から読んでいるという学生は極めて少ないと考えられる。そのため、各作品のあらすじや内容、また日本の古典に現れる日本特有の概念、思想、文学的理念等も、媒介語を通して読み解いて細部まで理解するのは決して容易ではないはずである。

英語を母語としない交換留学生だけでなく、日本語母語話者である本学正規生も同じ問題に直面する。ただし、日本国内の中・高等学校で教育を受けた学生であれば、古文の予備知識はある程度持っているはずなので、この点、日本の古典を学ぶのが初めてだという交換留学生に比べれば、各作品の大筋や主な概念を理解する上での負担は幾分か軽減される。

4.3 英訳文としての日本古典

筆者は、古典の翻訳文の一語一語を辿りながら、個々の表現の英語としての妥当性を論じることが「日本古典文学入門」の目的だとは考えていない。本授業では、古典の素材として用いる英訳を通して、まずは話の大筋をしっかり抑えることが受講生に与えられる最初の課題となる。しかし、これは必ずしも簡単な作業ではない。

古典の英訳ともなれば、現代日本語にさえ置き換えにくく、詳細な注釈や補足説明を要する古語、各時代の生活様式や風習、また、官職名や地名等といった事柄が多く登場する中、いかにこれらを的確に且つ簡潔に訳出できるかが課題となってくる。結果として翻訳文そのものも難解な文になることがある。読者の負担を考慮し、文中の注等を最小限に留めるべきか、それとも注や補足説明が増えてもできる限り原文に忠実な訳を施すべきか、翻訳者は難しい判断を迫られる。また、

読者の便宜を図って、より簡潔な文を志したと思われる訳でも、翻訳者の用いる文体や表現によっては、その読解には比較的高度な英語能力を要求される場合がある。以下に、エドワード・サイデンステッカー氏訳の「*The Tale of Genji*」と、ロイヤル・タイラー氏訳の「*Japanese No Dramas*」から一例ずつ挙げて述べることとする[(12)]。

An embassy came from Korea. Hearing that among the emissaries was a skilled physiognomist, the emperor would have liked to summon him for consultation. He decided, however, that he must defer to the emperor Uda's injunction against receiving foreigners, and instead sent this favored son to the Koro mansion, where the party was lodged. The boy was disguised as the son of the grand moderator, his guardian at court. The wise Korean cocked his head in astonishment.

"It is the face of one who should ascend to the highest place and be father to the nation," he said quietly, as if to himself. "But to take it for such would no doubt be to predict trouble. Yet it is not the face of the minister, the deputy, who sets about ordering public affairs."

The Tale of Genji, Volume 1, Chapter 1 "The Paulownia Court,"
translated by Edward G. Seidensticker（Tuttle Publishing, 1976）

上は「桐壺」の巻で、来朝した高麗人の中に優れた人相見がいると聞いた帝（源氏の父親）が密かに外国使臣らを迎え入れる鴻臚館に源氏を遣わして人相を占ってもらう場面である。帝は源氏の身元を明かすわけにはいかないので、後見人役を務める右大弁の子として鴻臚館に遣わす。（とても右大弁の子とは思えない）源氏の容姿を見て驚く高麗の人相見は、首をかしげながら次のように言う。

「国の親となって帝王という最高の位にのぼるはずの相のおありになる方であるが、さてそういう方として見ると、世が乱れ民の苦しむことがあるかもしれません。ただ朝廷の柱石（ちゅうせき）となって、天下の政治を補佐するという方として判断すると、またその相が合わないようです。」[(13)]

後に鴻臚館での様子を聞いた帝が考えに考え抜いた揚句、我が子を臣籍に下して「源」姓を与えたという話は周知のとおりである。

サイデンステッカー氏の英訳を再度眺めてみよう。人相見のことばに当たる件は、この類の文章に慣れていなければ、また、平安朝に関する予備知識もある程度持ち合わせていなければ、一読しただけでは完全に理解するのは難しいだろう。のみならず、前の段落は、「emissaries」「physiognomist」「injunction」「grand moderator」「cocked his head」などといった語句が立て続きに現れる文体となっているため、読者には時間を割いて丁寧な読みをしていくことが求められる。

もう一例は、謡曲「邯鄲」から引用するものである。まずは、タイラー氏の英訳から見ていきたい。

ROSEI：　Pass the cup!
Below, as Chorus sings, Dancer performs a 'dream dance'.
CHORUS：　O pass the cup, I say,
that clear, chrysanthemum waters
speed on down the stream, till eager hands
dart from sleeves gay with chrysanthemums
to pick it up again: a swaying dance

of graceful, sweeping gesture, as of light;
while, aloft, the round and radiant moon
circles in the everlasting sky.

Japanese No Dramas, “Kantan,”
translated by Royall Tyler（Penguin Classics, 1992）

先に挙げた「桐壺」の訳と比較すれば、両者における語彙や文体の違いはすぐに感じられるはずである。原文においても、またその訳においても、詩歌的要素が顕著な能「邯鄲」は、登場人物の心境や彼らを取り巻くさまざまな出来事を叙述する物語の文体とは自ずと趣を異にする。また、タイラー氏の訳では、語彙そのものは比較的平易なものが使われており、改行などの工夫によって原文のリズムとテンポを醸し出している。

「邯鄲」では、シテの盧生が旅の途中、邯鄲という地で宿に立ち寄り休息を取る。宿の主に不思議な枕を勧められ、床に着くと盧生はまもなく夢の世界に入る。夢の中では、盧生は楚国の帝に譲位され、五十年間、帝として国を支配し栄華を極める。しかし、夢から覚めると、五十年の栄華は瞬く間に消え去ってしまい、盧生は人の世の栄枯盛衰の儚さを悟らされる。

先に掲げた地謡（CHORUS）の英訳に戻りたい。これは、原文では「廻(めぐ)れや盃(さかづき)の、廻れや盃の、流れは菊水(きくすい)の、流(りう)に牽(ひ)かれて遥(と)く過ぐれば、手まづ遮(さへぎ)る菊衣(きくごろも)の、花の袂(たもと)を翻(ひるがへ)して、さすも引くも光なれや、盃の影の、廻(めぐ)る空ぞ久しき」(14) というごく短い文に当たる箇所だが、実はここに描かれている宴は、ある中国故事を背景とするものである。タイラー氏が「chrysanthemum water」と訳している「菊水」とは、菊の露を飲んで仙人になったという「菊慈童」の故事によるもので、ここでは不老不死を象徴するものである (15)。また、この菊水の流れに浮かべた盃が目の前を通り過ぎていく前に、参加者が詩を詠まなければならないという遊戯は、言うまでもなく、かの曲水の宴を模倣したものである (16)。引用の件は、盧生が夢の中で長寿の霊薬を勧められるという場面の直後に見られるものである。この後、夢から覚め、人の世には不老不死などない、それこそ夢のまた夢であることに盧生は気付くわけである。こうした故事が話の背景にあると知れば、作品の全体の解釈と理解は一段と深まる。

以上、二例に過ぎないが、本授業の受講生の約三分の二を占める非英語母語話者にとって、この類の文章を毎週読み解き、充分に理解することは決して容易な作業ではない。では、これらの英訳以外に、何を手掛かりとすればよいかと考えた場合に、原文、現代日本語訳、またはその両方に目を向ける学生が出てきても不思議ではない。特に留学生の場合は、来日前とは違い、日々の生活の中で日本語に接する時間が飛躍的に増えていくので、日本語の勉強が進むにつれ、日本語で書かれた資料への関心は自然と高まるようになると考えられる。

特に和歌や俳諧など、韻文の場合は、どうしても外国語では伝えることが困難である日本語のリズムや語調などを感じ取るためには、直接原文に触れることも必要であろう。原文や現代日本語訳からは、視覚的情報も得られる。すべて漢字で綴った文、句読点が使われていない文、変体仮名で書かれた文、和漢混交文等など、それぞれの文体の特徴、また漢字が使用されている場合にはどのような漢字が使われているかを目で確認することが重要である。

おそらく留学生自身も、日本語が上達するにつれ、上記のようなことを少しずつ意識し始めると考えられる。本授業に関して、9 割の留学生が原文、現代日本語訳、またはその両方があったほうがよいと答えたのはその現れだと思われる。

5. 過去四年間の実践の総合評価と課題点

以上のように、過去四年間を振り返り本授業での実践を総合的に見て来ると、今後取り組むべき課題としては、まず次の３点を挙げて検討してみたいと思う。

(1) 共学における留学生・日本人学生の役割の明示化
(2) 留学生・日本人学生を対象とした共学の特殊性を生かした日本古典文学教育
(3) 受講生の受講目的と日本古典等の学習歴、並びに本国・協定校における日本古典の教育状況についての調査の実施

5.1 共学における留学生・日本人学生の役割の明示化

昨年度（2009）秋学期終了時に KUINEP 授業アンケートを実施した際、「学生交流への関心」について、本授業を受けたことによってどの程度変わったかを尋ねた。本学正規生も交換留学生も平均点はほぼ同じであった（表9）。しかし、本学正規生のほとんどが「ある程度増した」または「非常に増した」と答えたのに対し、交換留学生では、23 人のうち７人（約３割）もの学生が「変わらない」と答えている。

この結果を見る限り、KUINEP 講義が日本人学生をはじめ、多国籍の学生と交流するための場としての機能を持っているということに対する交換留学生の認識はやや薄いようである。やはり、日本古典、またその背後にある日本の文化や歴史などの知識を増やし、理解を深めることのほうが彼らにとって優先課題であって、他の学生とのコミュニケーションを図る動機は若干弱いのではないかと考えられる。

ところが、「授業分野での議論する力」の項目では、交換留学生 23 人のうち、「変わらない」とした学生が５人のみで、残りの学生は全員「ある程度増した」（10 人）または「非常に増した」（8 人）と答えている。一方、９人の本学正規生のうち、「ある程度増した」と答えた学生が４人で、他の５人は「変わらない」と答えている。

教育する側としては、今後多国籍の学生を対象とした共学の取り組みを実施していく上に当たって、交換留学生、本学正規生、それぞれの役割を学生に伝えるようにして、共学への関心と意識を高める必要があろう。と同時に、留学生と日本人学生が互いに協力し、互いに刺激し合う仕組みとそれを支える教室環境の樹立に力を入れるべきだと考える。

表９　「日本古典文学入門」を終えた受講生の達成感

（2009 年度秋学期終了時に実施した授業アンケートより）

項目	交換留学生【23人】					本学正規生【9人】					全回答者【32人】				
	非常に増した 4	ある程度増した 3	変わらない 2	減退した 1	平均	非常に増した 4	ある程度増した 3	変わらない 2	減退した 1	平均	非常に増した 4	ある程度増した 3	変わらない 2	減退した 1	平均
授業分野の知識	11	12	0	0	3.5	0	7	2	0	2.8	11	19	2	0	3.3
授業分野への興味	11	12	0	0	3.5	1	8	0	0	3.1	12	20	0	0	3.4
授業分野での探究心	10	12	1	0	3.4	1	7	1	0	3.0	11	19	2	0	3.3
授業分野での分析能力	9	12	2	0	3.3	2	6	1	0	3.1	11	18	3	0	3.3
授業分野での議論する力	8	10	5	0	3.1	0	4	5	0	2.4	8	14	10	0	2.9
将来に向けてのアイディア	8	10	5	0	3.1	1	4	4	0	2.7	9	14	9	0	3.0
学生交流への関心	4	12	7	0	2.9	2	6	0	1	3.0	6	18	7	1	2.9
日本文化の理解	12	10	1	0	3.5	1	8	0	0	3.1	13	18	1	0	3.4

5.2 留学生・日本人学生を対象とした共学の特殊性を生かした日本古典文学教育

以上見てきたように、媒介語を通して多国籍の学生が日本の古典を共に学ぶ場合、さまざまな課題が浮上する。しかし、これは課題であると同時に、本プログラムにとって共学の新たな可能性も秘めていると考えられる。

本学のKUINEPプログラムのような共学への取り組みは他大学でも行われているが、教授言語として日本語または媒介語（大概は英語）のどちらかが用いられるのが通例である。しかし、教授言語を日本語とした場合、日本語能力によって留学生の受講を制限せざるを得ないことがある。反対に、英語を教授言語とした場合、本授業で見られるように、日本語を母語とする学生、その他非英語母語話者は、講義の内容は理解できても、議論やレポートの作成は第二言語以下の言語で行うため、特に日本特有の事柄（他の言語に訳しにくい事柄）については論述が困難で、充分な達成感が得られるとは限らない。

となると、どちらか一方だけに限定するよりも、むしろ日本語と英語の両方の言語を使用する学習環境が、日本語・非日本語母語話者の双方に望ましいのではないかと、筆者は考える。これは決して各人に使い慣れた言語を使用させ、言語面での負担を軽減するためではない。むしろ、同じ教室の中で、日本語母語話者には英語、非日本語母語話者には日本語を使用させ、これによって各人の不得意とする言語力を向上させることが狙いである。

交換留学生は、ほとんどの場合、日本古典の予備知識がなく、日本語能力も限られている。しかし、5.1で述べたように、彼らにとって新たに得た日本古典や日本文化の知識について英語で論じることは、さほど大きな負担にはならないようで、少なくとも授業終了時には日本の古典について議論する力が身についたと感じた学生が多いことははっきりしている（表9参照）。のみならず、4.2で詳述したように、本授業を受講した2009年度の留学生の9割は、実際の日本語力の如何に拘わらず、古典の原文ないし現代日本語訳も使用した方がよいと答えている。こうして彼らが日本語の使用に対して非常に積極的な姿勢を示していることを考えれば、やはり英語・日本語の両言語による授業形体の模索も視野に入れるべきではないかと思う。

一方、主として日本語を母語とする本学正規生の場合は、日本の古典はおおむね中、高等学校である程度学んできているため、主流の作品なら原文に触れたこともあるだろうし、作者や時代背景に関する予備知識もあるはずである。しかし、自己の考えを順序立てて英語で論理的に述べたり、他の学生と議論したりするという面ではまだ課題が残っている。

詰まるところ、言語能力（日本語、英語）及び日本古典の予備知識の二つの観点から見た場合、交換留学生と本学正規生は、実はお互いに相手の欠如している部分を補い合うことのできる互恵関係にあることに気付く。この互恵関係こそが、共学の新たな可能性を引き出すものだと、筆者は考えている。

5.3 受講生の受講目的と日本古典等の学習歴、並びに本国・協定校における日本古典の教育状況についての調査の実施

上記で述べたような新たな共学の企画と実施への取り組みに先立ち、本授業の全受講生を対象とした受講目的等に関する調査を実施する必要がある。受講目的の他に、各人の日本古典や日本文化等の予備知識･学習歴、また日本語や古典文法の学習歴も当然調査項目に加えるべきであろう。さらに交換留学生については、出身大学（協定校）における日本古典や日本語等の教育状況に関する調査を実施する必要がある。

なお、日本古典や日本語の教育について、協定校との連携を強化することも重要な課題である。高橋・林（2005）は、古典文法科目の実践例を通じて日本語教育の観点から、大学間交流協定締結大学との連携の重要性を指摘している。「来日前」、「留学中」、「帰国後」と三段階に分け、それぞれの期間と教育環境に必要となる日本古典その他関連分野に関する知識の習得や、学生の目標に配慮した教育のアプローチや指導法について言及している[17]。

6. KUINEP 授業形式の再検討

6.1 留学生・日本人学生を対象とした共学の特殊性を生かした新たな授業形式の模索

先述したように、これまで実施してきた「日本古典文学入門」は基本的に講義形式で行われてきたものである。講義では、ディスカッションの機会もできるだけ取り入れるようにして、交換留学生・日本人学生間の学術的交流を図ってきた。しかし、留学生と日本人学生の両者がさらに議論を発展させて、また広く国内外に日本古典や日本文化を発信していくためには、新たな授業形態の可能性を検討する必要があるように思う。

筆者は、英語・日本語の両言語による少人数セミナー形式の導入を提言してみたいと思う。授業内容の専門性と共学による実践的活動を重視した新たな授業形態である。日本古典文学を例に取れば、講読、あるいは受講生に発表の場を与える演習等が考えられる。

日本語母語話者と非日本語母語話者の学生には、それぞれ、英語・日本語の運用能力の強弱がある。では、これを反対に利用して、留学生には日本語を、また日本人学生には英語を使用させ、共同作業をベースにした学習活動を展開してみてはどうだろうか。留学生と日本人学生が共に学ぶ教育環境の中で、それぞれが苦手とする言語を使用して話す機会は非常に限られている。これでは学術的議論等に必要な応用力はなかなか身につかない。

具体的な学習活動としては、まず少人数のグループでディスカッションを開始し、学生同士で、担当教員が提示するチェックシートに沿って、授業内容の理解度を測り、不明な点を確認する。各グループのメンバーは意見や感想を語り合い、疑問も出し合う。この段階での議論は基本的に英語で行うことが望ましいと考える。ただし、作品の時代背景、当時の生活様式や風習、また古語と現代日本語との意味やニュアンスの違いは、必要に応じて英語に加え日本語も用いて補足説明を行うようにする。さらに、学生はそれぞれ好きな作品（抜粋）を取り上げ、口頭発表の準備に取り組む。発表では、原文の一部を基に、留学生は日本語で、日本人学生は英語で、適宜現代語訳や英訳にも触れながら、解説を行う。また、対象作品に現れてくる重要な概念や文学的理念、作品の時代背景についても説明ができるように、注釈本をはじめ、必要な文献や研究資料の調査に当たる。発表本番に向けて、学生は担当教員とグループの他のメンバーを前に、発表の練習を行い、フィードバックとアドバイスを得、さらに練習を重ねる。発表での質疑応答は英語・日本語の両言語を自由に用いることとする。日本人学生と留学生が両言語を用いながらお互いに助け合うという学習活動を取り入れることによって、学生間の話し合いは容易に、且つより密なものになることが期待される。

無論、このように、両言語を使用する場合、受講の必須条件として、英語能力と日本語能力のある程度具体的な基準を設ける必要がある。また、言語力の他に、日本古典、古典文法の予備知識や学習歴に関する受講条件もあらかじめ定めておくべきであろう。

6.2 共学を介しての日本古典文学教育―今後の展望

『源氏物語』は言うまでもなく、今では日本の古典のマイナーな作品までもが国境を越え世界的な研究の対象となっている。日本の「文化的遺産」（cultural legacy）とも称すべきこれらの古典作品の研究は、今後はさらに進められ、多国籍の研究者によって広範囲に展開されていくことが予想される。

他の研究分野ではもはや通例となっているが、日本の古典も、今後は日本人研究者と外国人研究者の両者が交互に学術的対話を持ちながら、国境を越えたコラボレーションの形でその研究を発展させていくことが予想され、また大いに期待されるところである。こうした共同研究に資することのできる次世代の人材育成も急務の課題で、その実践には日本国内の大学が率先して推進すべき事象である。

こうした次世代の人材育成の観点から考えても、本稿で提言した新たな授業形式をはじめ、日本人学生と留学生による共学を介しての日本古典文学教育への取り組みは意義あるものではないかと思う。

日本の古典を題材にした学術的なダイアログを交わすことによって、日本人学生も交換留学生も、考察力と日本文化コミュニケーション能力を身につけることが可能になる。のみならず、相互に他国の文化、風土や国民性により培われたさまざまな見解や価値観に触れることによって、留学生も日本人学生も、また新たな視点で日本の古典や日本の文化を捉えることができるはずである。このような取り組みへの参加を契機に、留学生と日本人学生が広く国内外に日本の文化を積極的に発信していくことを期待して止まない。

注

（１）http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/international/program/kuinep/

（２）平成７年度に「短期留学推進制度」が文部科学省によって創設された。本制度は、大学・大学院等に在籍したまま、１年間以内の短期間、海外の大学間学生交流協定校から日本に留学する学生及び日本から協定校に留学する学生を支援する制度である。短期留学プログラムを実施している国立大学のほとんどは、コース定員を 20 ～ 40 人程度、使用言語を英語、また履修単位数を 30 単位前後に設定している。文部科学省発行『我が国の留学生制度の概要 受入れ及び派遣』（平成 21 年度）〔http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2010/01/13/1288626_3.pdf〕、『平成７年度我が国の文教施策』、第４節「留学生交流の推進」〔http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_255.html〕を参照されたい。

（３）一方、一般交換留学生は、学部生の場合は科目履修が必修であるため、高度な日本語力が求められる。大学院生は、科目履修をせずに、教員の指導を受けながら専門的研究のみを行うことも認められており、日本語以外の言語で教員の指導を受ける場合には、日本語能力は必須条件ではない。

（４）留学生が文語文で書かれた文献や資料に直面して当惑するのは、「源氏物語」的な古文（いわゆる「古典」）ではなく、むしろ明治時代以前の歴史的資料、公文書、書簡などに見られる漢文訓読文や和漢混淆文であり、これに加え、歴史的仮名遣いの知識を身につけ、見慣れない古語特有の表現を理解することも求められるとする。坂内泰子、「留学生と文語文読解の必要性」、*Bulletin of the College of Foreign Studies, Yokohama*, 27, 2004。

（５）本稿で言う「日本文化コミュニケーション能力」とは、外国人留学生と日本人学生が、互いに、または広く国内外における第三者に対して、日本文化についての知識や意見を発信する能力や相手と議論する能力のことを意味する。本授業は英語で行われているため、受講生の授業内の学習活動については英語による発信能力を指すが、授業外の活動においては、母語その他の言語によって日本文化について発信し議論する機会もあると考えられるので、その限りではない。

（６）本授業では翻訳テキスト以外に、次の文献を参考図書としている（一部翻訳テキストとしても使用）。

Carter, Steven D. (translator), *Traditional Japanese Poetry: An Anthology*, Stanford University Press, 1993.

Keene, Donald (editor), *Anthology of Japanese Literature: from the earliest era to the mid-nineteenth century*, Grove Press, 1994.

McCullough, Helen Craig (editor), *Classical Japanese Prose: An Anthology*, Stanford University Press, 1991.

Miner, Earl et al., *The Princeton Companion to Classical Japanese Literature*, Princeton University Press, 1985.

Shirane, Haruo (editor), *Traditional Japanese Literature: An Anthology, Beginnings to 1600*, Columbia University Press, 2008.

Varley, H. Paul, *Japanese Culture*, 4th Edition, University of Hawaii Press, 2000.

なお、他の国立大学で実施されている交換留学プログラムにおいては、管見の限り、主として日本の古典を取り上げている科目は少ないが、日本文学などをテーマにした授業はいくつか散見され、中には日本の古典を扱うものもある。たとえば、東京大学の AIKOM（“Abroad in Komaba”）プログラムでは「Japanese Literature, Culture, and Film」、「Reading Japanese Novels: The Dilemma of the Modern and Beyond」（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/aikom/eng/academic.html）、大阪大学の OUSSEP（Osaka University Short-Term Student Exchange Program）では「Introduction to Japanese Literature」（日本古典を含む）、「Literature and Language of Japan and China」（リレー講義、日本古典を含む）、「Japanese Literature, Modern and Contemporary」（http://ex.isc.osaka-u.ac.jp/oussep/index.html）などが提供されている。

（７）なお、レポートの作成に当たって、出版物をほとんど利用せずに、専らオンラインの情報を頼りにレポートを書くという学生が年々増えて来ていることも最近の傾向としてある。日本古典の場合、すぐに入手できる英訳版や英語で書かれた論文は限られているため、電子情報の利用はある程度はやむを得ないと考える。また、国内外の電子ジャーナルや教育研究機関によるデータベースの類に至っては、むしろその活用は推奨されるべきであろう。ところが、交換留学生・本学正規生を問わず、受講生のレポートに顕著なのは、wikipedia や個人のブログ等、必ずしも信頼性が充分とは言えないオンラインサイトからの引用である。書籍や論文集等にはほとんど触れていない様子が窺われ、非常に気がかりな点である。

以上の事柄を考慮し、筆者は 2010 年度の授業より、全受講生に対し、各自のレポート課題に関する詳細なアウトライン並びに working bibliography（参考文献の一覧表）を学期半ばに提出することを義務付けている。詳細は本稿末尾に掲げたアウトラインと working bibliography のフォーマット（抜粋）を参照されたい。

無論、本授業におけるレポートの出来栄えは、最終的に各人の英語能力に依存するところが大きいことは否めない。しかし、英語の文章力そのものよりも、むしろ文学作品を取り上げる際にどれだけ自分の考えを順序立てて述べることができるか、どれだけ論理的に且つ理解しやすく書き進めることができるかが、レポートの優劣を分ける決め手となるため、今後はさらにアカデミック・ライティングを徹底して指導していく必要があると考える。

（８）すべての KUINEP 学生の日本語受講状況（2006 ～ 2010 年）を以下の表 10 に示す。

表 10　KUINEP 学生　2006 ～ 2009 年度　日本語受講者数（レベル別）

	2006		2007		2008		2009		2010	合計
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	
初級I	2	14	1	14	0	14	2	13	5	65
初級II	5	1	7	2	11	8	7	8	10	59
中級Iプログラム	3	11	2	11	2	8	4	11	5	57
中級I選択	2	0	2	0	3	0	3	1	2	13
中級I～II	0	0	0	0	4	0	0	0	3	7
中級II	8	6	10	5	4	10	7	8	10	68
中級II～III	0	5	0	2	3	0	0	0	1	11
中級III	5	0	6	0	0	0	4	7	2	24
中級III～上級	2	0	0	1	1	2	0	0	3	9
上級	0	0	1	0	0	0	2	0	0	3
その他	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	27	37	29	35	28	43	29	48	41	317

（９）図２のデータには、「日本古典文学入門」の KUINEP 受講生で日本語の授業を受講しなかった学生は含まれていない。2008 年度に本授業を受講した計 27 人の KUINEP 学生のうち、日本語授業を受講しなかった学生が２人、また、2009 年度に受講した計 31 人の KUINEP 学生のうち、日本語授業を受けなかった学生が１人である。

（10）他大学での交換留学プログラムでは、たとえば、名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE: Nagoya University Program for Academic Exchange）における文学部提供の「日本言語文化入門 I・II」「日本文化論 I・II」なども日本語能力試験２級またはこれに相当する日本語力を必須条件としている。

（11）充分な日本語能力を有する学生は、各学部が開講している通常科目を KUINEP 科目に加え、または代えて１科目程度履修することが認められる。

（12）本授業で使用する英訳本については、数少ない完訳版の中から、学生自身が比較的容易に入手できることを前提に、各訳の文体は勿論のこと、執筆された年代等も考慮し、大半が非英語母語話者で、なお且つ日本古典初心者である受講生にとって親しみ易いものを中心に選ぶようにしている。

（13）現代日本語訳は阿部秋生他（校訂･訳）､『源氏物語 上』（日本の古典をよむ 9）､小学館､2008 による。先に述べたように、本授業での教授言語は英語であるが、授業の内容柄、また日本語能力を有する留学生も受講していることから、授業中に原文・現代語訳など、補足として日本語による資料を提示することがある。その際、可能な限り原文・現代語訳（または校注）を対応させたテキストを中心に使用するようにしている。本注に掲げた現代語訳本もその一例であるが、日本古典文学全集（小学館）、新日本古典文学大系（岩波書店）等も利用することが多い。

（14）小山弘志他（校中・訳）『謡曲集（2)』（日本古典文学全集 34)、小学館、1975。

（15）周の王の侍童であった菊慈童は、罪を得て酈県山に流されたが、その地で菊の露を飲み不老不死の仙人になったという。その地を流れる菊水という白河の支流の谷の上に菊があり、その花から滴り落ちる滋液を飲む者は長寿を得たとされる。

（16）タイラー氏は「An evocation of *kyokusui no en* (‘the feast of the meandering waters’), at which cups of wine were set floating down a stream. A participant had to compose a Chinese poem before a cup drifted past, then pluck the cup from the stream and drain it.」との注釈をつけている。

（17）高橋久子・林明子、「留学生対象科目としての古典の位置付けと実践例—東京学芸大学における日本語教育の場合—」、*CRIE Review of International Education*, No. 2, 2005。

参考文献

（１）阿部秋生他（校注・訳）（1970）『源氏物語一』（日本古典文学全集 12）小学館

（２）阿部秋生他（2008）『源氏物語 上』（日本の古典をよむ 9）小学館

（３）小山弘志他（校注・訳）（1975）『謡曲集（2)』（日本古典文学全集 34）小学館

（４）坂内泰子（2004）「留学生と文語文読解の必要性」*Bulletin of the College of Foreign Studies, Yokohama*, 27.

（５）高橋久子・林明子（2005）「留学生対象科目としての古典の位置付けと実践例—東京学芸大学における日本語教育の場合—」*CRIE Review of International Education*, No. 2.

（６）恒松直美（2006）「大学国際戦略：国際カリキュラム構築と日本人学生の参加」『広島大学留学生教育：Journal of International Education』10.

（７）恒松直美（2006）「短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の日本人学生への開講ニーズ調査」『広島大学留学生センター紀要』16 号

（８）花見槇子（2006）「留学生と日本人学生の合同授業の創出」『三重大学国際交流センター紀要』１号

（９）*The Tale of Genji*, translated by Edward G. Seidensticker (1976),Tuttle Publishing.

（10）*Japanese No Dramas*, translated by Royall Tyler (1992), Penguin Classics.

（京都大学国際交流センター・准教授）

Collaborative Learning among Japanese and International Students

—Case Analysis of an Introductory Course in Classical Japanese Literature Offered at Kyoto University—

Shikiko Kawakami

Abstract

This paper addresses a number of the issues surrounding collaborative learning among Japanese and international students. Courses designed to stimulate and foster intellectual exchange among students of different nationalities and cultural backgrounds are offered at a number of Japanese universities in a variety of disciplines. The language of instruction is usually either Japanese or English. The author has been teaching an introductory course in classical Japanese literature since 2006 through the Kyoto University International Education Program. The course is taught in English and is offered concurrently to international exchange students and Japanese undergraduate students. In this paper the author examines some of the unique challenges that arise from teaching material that is inherently Japanese – from both a linguistic and cultural perspective – simultaneously to Japanese and international students, the majority of whom are non-native speakers of English. The author also discusses the possibility of offering a similar course as a small group seminar, which would allow the incorporation of new teaching methods that actually utilize students' strengths and weaknesses to their advantage in the collaborative learning environment.

（Associate Professor, The International Center, Kyoto University）

【付録 1】

Term Paper Outline **Name:** _____

Student ID: _____

1. Paper topic number.
2. List the specific work or works of literature you will be using. Indicate the title, original author (if known), translator, publisher, and year of publication for each work.
3. List the specific chapters, pages, etc. that you have already read from these works.
   If you have not begun reading yet, write "none".
4. Introduction of paper:
   4-1 Explain the **purpose** of your paper. Indicate the **literary themes, ideas, or concepts** (or social practices, customs, etc.) that you plan to focus on in your paper.
   You may select themes or concepts that we have not covered in the course.
   You should state in clear, precise terms **what you will try to prove** in your paper.
   4-2 Explain your **method** of analysis.
5. Body of paper:
   5-1 Cite 1 or 2 **specific passages (lines of text) or poems, etc.** that you plan to analyze and use as examples in your term paper. In this outline and in your term paper, **enclose all cited material (引用) in quotation marks** ("□□□□□□"), and **immediately after each citation, list the title of your source (出典) , author or translator, and the specific pages** in which the citation is found (e.g. "□□□□□□" (*The Tale of Genji*, Edward Seidensticker, p. 14-15)).
   In your paper, of course, you will need to cite other examples in addition to the one (s) listed below.
   5-2 Analysis/discussion
   Briefly explain **why the particular passages (lines of text) or poems, etc. that you cited above in 5-1 are appropriate examples** for you to use in your analysis.
6. Conclusion
   Briefly explain **what you expect to be able to conclude** through your analysis.
   CHECK! → Does your expected conclusion match the purpose that you stated in 4-1 of this outline? If your expected conclusion and purpose do not match, you probably need to re-think either your purpose, expected conclusion, or both.

NOTE: As you begin writing your paper, you may find it necessary to change your method or approach, analyze other themes/concepts, or refer to additional sources.
You are encouraged to make any changes you feel would improve your paper.
You should not feel restricted by this outline. If, however, you need to make a major change to your paper (for example, a complete change of paper topic), you must notify the instructor no later than ***.

【付録 2】

Working Bibliography

Name: _____

Student ID: _____

Prepare a list of the literary works, reference materials, and other sources you plan to use to write your term paper. You should include not only those sources from which you plan to cite material directly, but also any sources you plan to use as additional references. You may also include sources written in Japanese or other languages.

When submitting your term paper, attach a revised (updated) bibliography to the end of your paper.

IMPORTANT! Wikipedia, personal blogs, and other similar online sources are **not** appropriate sources of information for an academic paper. You are strongly encouraged to use only published material (books, journal articles, etc.) or other reliable sources of information. Online databases, electronic journals, or other online sites which are managed by universities, research institutions, or government agencies are acceptable, but you must indicate the identity of the source, author or organization that created the site, and complete access information (URL) for these sources.

List each source for your bibliography in the following manner:

[1] Title (if in English, use *italics*) , [2] original author (if known), [3] translator/editor,
[4] publisher, and [5] year of publication.

List your sources on the next page.

Example:

1. *The Tale of Genji*, volumes 1 and 2, Murasaki Shikibu, translated by Edward Seidensticker, Tuttle Publishing, 1976.
2. *Genji and Heike*, translated by Helen Craig McCullough, Stanford University Press, 1994.
3. …